

皮革の社会史 第1回

ユダヤ人と皮革業

西村 祐子

はじめに

五年ほど前、私はある大学で欧米やアジアからの留学生達の為に日本のマイノリティについての講座を始めた。重点的に扱ったのは被差別部落で、比較社会的な視点からインドの不可触民カーストや欧州のマイノリティも論じていく内容だった。授業は英語で行われていたので日本人の学生は帰国子女が少しいるだけだったが、開講第一回目に「なぜこの授業を取りたいと思うのか」と学生たち全員に尋ねてみた。ある日本人の女子学生の番が来て、促され

て立ち上がった。「最近父が被差別部落の出身だと知り、ショックをうけた。だが父の告白を聞いた後で被差別部落について知りたいと思うようになった。なぜ日本では代々皮革に関わった人々が差別されるのか。理由を知りたい。そして皮革に携わってきたコミュニティについてすべてを知りたい」。思いつめたような真剣なまなざしで一気にこう答えた。

髪を金髪に染め、表面的には何の心配もなさそうな帰国子女と思われる女子学生からの真摯な要求に私は感銘を受けた。その後彼女のように被差別部落に繋がっていると思われる学生が私の授業を聴講す

ることが続き、疑問に思ったことがある。被差別部落を扱う授業は日本語でも行われているであろうに、なぜ留学生向けの英語のクラスを取るのだろうか。私なりに考えついた結論は、授業が英語で行われているからこそその受講であろうということだった。彼らにとっては留学生たちと一緒に英語で授業を聞く方が楽なのではないか。日本語の世界の外にたつてこの問題を考えることで、海外の学生たちと同じような目線で被差別部落を眺めることができる。それを望む若い人々がいるのだろうと改めて思い至った。「皮革業の社会的地位は文化によって異なり、きわめて相対的なものだ」と納得することを彼らは欲しているのではないだろうか。それこそが積極的な自己イメージの構築に役に立つのではないだろうか。

皮革業に従事する人々は他の社会ではどのような社会的地位にあるのかを知りたいと直接いわれたこともある。東日本部落解放研究所で、ある歴史家と話をしていた時のことである。「欧州などでは必ず

しも皮なめし職人の地位は低くない。むしろ社会的地位が高い場合もあり、教会での発言権も強い」と話したところ、その歴史家は興味を示した。「それはなぜなのか。理由を知りたい」

そこから海外の伝統的な皮革業従事者の集団についての私の比較研究がはじまった。確かに皮なめしの工程には社会的なタブーがからんでいることは多かった。動物の屍から皮革をつくる技術は高度で熟練を要するものだが、時と場所、文化によってはその過程には悪臭との格闘以上に熟練を要する高度な作業があり、一般人には難しい領域である。その高度な技術の価値が社会的に評価されれば社会的地位は上昇するし、体制によって故意に引き下げられたままであれば上昇しない。また、大量の水と広い作業場も必要とされるために町中でなく川沿いに住むことを余儀なくされたことから、社会の主流から排除されたマイノリティ集団と結びつけられやすかった。特に皮なめし業は何らかの事情で自分たちの故

国や居住地を離れて暮らす民族集団（ディアスポラ）が進出していきやすい職種でもあった。

だが、皮革の製造と販売に集団として関わっていったディアスポラたちは、逆に皮革によって大きな経済的成功をおさめてもいる。その成功によって社会的地位を上げ、経済的に裕福になり、より社会的に認められやすい領域に進出する人々もでてくるようになる。しかし彼らは一般的には皮革業に携わった「ご先祖」に対して誇りをもち続け、先祖たちと皮革業との関わりに言及する。この点が日本の伝統的な皮革業集団と比べて大きく異なる点である。皮革業に携わったディアスポラ達をみると、受けた迫害の歴史は集団の結束を強め、逆に自己のアイデンティティ（自己イメージ）の一角をなしている。「肯定的な自己イメージ」といってしまえばあまりに悲しい記憶であっても今日の社会的成功に繋がっている民族の歴史の一環として迫害の歴史が位置づけられている。そして彼らの民族の歴史のなかに皮革業が登場するのである。

の処理に関わる集団が、宗教的な思想から卑賤視される例などがある。なめし過程で用いられていた動物の糞や尿などによる悪臭が立ち込める職場への嫌悪が否定的な評価を生むこともある。

動物の皮は、手を加えなければすぐに腐敗したり、柔軟性が失われ板のように硬くなったりしてしまう。それを樹液や種々の薬品を使って加工することで柔らかくし、耐久性を高める方法が「なめし」である。古代から草木に含まれているタンニン（渋）と皮のもつコラーゲン（たんぱく質）を結合させてなめし方法があるが、噛んで柔らかくしたり動物の脳・糞尿を用いることもあった。唾液に含まれている酵素や糞尿に含まれているアンモニア、動物の脳に含まれるオイル成分が皮を柔らかくするからであった。しかしそれらの素材が放つ「悪臭」と「屍」の一部を用いることへの抵抗感も相まって、欧州や中近東でもかつては皮なめし業が卑賤な職だとされることがあった。

水を含んだ重い皮を移動させる仕事は体力が必要

1、皮と革の道


「絹の道」という通商ルートを示す言葉があるくらい絹は古来から儀礼的に高い位置を占め、高級品として定着している。革は権力者や富裕者の威信を測るぜいたく品としてだけでなく庶民の日用品としても用いられていて、軍需品として歴史的にも極めて重要な役割を果たしてきた。それにも関わらず、「革の道」というのは聞いたことがない。しかし皮革は製造から販売に至るまで実に多くのプロセスを必要としていて、国家の境界を越えた皮革づくりの分業体制が早くから発達していた。欧州では国々をまたにかけて商売をする革商人も出現し、まさに「皮と革の道」は今日のグローバルーションを先取りして栄えた道である。また、皮革業には何世代にもわたって携わる特定の集団があり、多くがディアスポラである。

しかし革には一般に人が触れたくない死のタブーも関わっている。動物の死骸から取り出される原皮であった。用途によっては柔らかくし長持ちさせるために何百時間も足で踏み続けることが要求される。重い皮を何度も移動させる作業は過酷であった。それゆえ現場では安価な労働力を安定的に供給する必要に迫られていた。「きつい、きたない」という仕事はどこでも嫌われる傾向がある。また、なめしの工程では多量の水を使って皮を洗い続けることが必要なので水が大量に得られる河川敷で仕事をすることも多かった。河川敷には流浪の民が居住することが多く、皮なめしの労働者が彼らのなかからリクルートされる場合もあり、皮なめしが卑賤の仕事だという、一般人の思い込みにも繋がった。

だが皮なめしは単に重労働であるだけではなく、高度な技術が必要とされる。「なめしの時間や皮の質の違いで全部の皮をだめにしたりにすることになる」とは今日でも専門家がいうことである。そうした微妙な違いを見極めるには経験がものをいう。いつてみればそれが「企業秘密」でもある。この為、革ができる工程は一般人の目には長らく晒されるこ


とがなかった。一七世紀あたりまで西欧社会でも皮革製造工程は魔術と疑われていたが、それにはこのような背景もあつたのである。


一般人がはいりにくい領域であつたので現代でもなめし工場は世間一般とは異なつた目でみられることがある。フランス・アルザスで取材したあるジャーナリストは、なめし工場の近隣の人々が、「あの人たちは特殊だからね」などと皮なめし業者を外に位置づける傾向があると述べている。だが今の欧米社会では皮革業を見下す風潮はない。「私は五代目のなめし職人です」と英国のチェシャー地方で会つた化学博士号をもつ専門技術者が自家の伝統を自慢する。別の皮革専門家は革のことでは生き字引のような人だが、代々革手袋作りと羊の皮なめしをおこなつてきたことを誇りにしている。

また、代々の「家系」だけでなく皮革業に伝統的に従事してきた民族集団も存在する。その典型がユダヤ人である。より詳しくいえば、 スワールディックと呼ばれるイベリア半島に繋がるユダヤ人集団と



そのようにして集められた原皮の集積地は大坂の渡辺村などであつた。原皮を加工して細工をほどこして製品化する過程は別の革職人の仕事だつたが、ひとまず渡辺村に集積するまでの運び屋が必要である。加工前の原皮を村々で集める人も必要で、それを船に載せて集積地に運ぶ商人たちも活躍せねばならない。これらの仕事は大抵が被差別部落の有力者とその手代などの配下だつた。彼らは領主などから認可された商人でなければならず、要求される税を払うだけでなく、皮なめしに携わる労働者の前借りを引き受けたりせねばならなかつた。予定している分の皮が集まらずに損金がかさむこともあつたというから、必ずしも利益が自動的に約束されるわけではなかつたらしいが、近世後期には、皮革取引によつてかなりの財をなす者も現れていた。

 原皮が集まつて初めてなめし職人が仕事をできるようになるのだがなめしの工程も何段階も分かれていて数週間から数カ月かかる仕事である。なめした皮を集積する商人がいて、集まつた革を加工する

アシケナジムと呼ばれる東ヨーロッパやドイツに定住したユダヤ人集団である。ユダヤ人集団に属しているという思い込みが働くと、ユダヤ系の皮革会社の関係者からリクルートしようとしてコンタクトされる場合もある。化学者でなめし職人だつた英国人のH氏はなめし工場で長く働いてきたが、ある日電話がかかつてきて、欧州の大きな皮革企業から誘いを受けた。 私の姓がユダヤ系だと思つて」仕事をオファーしたのだつた。H氏が「ユダヤ系ではない」と伝えると、オファーは取り下げられた。

2. 皮なめしは賤しい仕事？

近世の日本では使役した牛馬が死ぬとそれを解体し皮を剥いで原皮としてなめし作業をする人々がいた。加えて鹿や猪など狩猟によつて仕留めた獲物の皮を剥ぎなめしをおこなつてもいた。また、朝鮮半島から足りない原皮を輸入していた。戦争がない近世であつても、皮革は武器だけでなく雪駄の材料としてかなりの需要があつたからである。

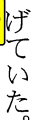
職人のところに売却し、履物や鎧などの製造をさせる商人もいる。革製品になるまでいくつもの工程が存在し、日本では被差別民と平民の両方が関わっていたが、彼らの関与する領域と居住区は画然と区別されていた。

原皮商人やなめし職人が皮田村に属していた被差別民であるのに対し、皮革加工の最終工程に関わり、文箱や鎧、刀の鏢などに加工する職人とそれらを商う商人らは平民(町人)であつた。身分制によつて体制を維持するという観点から被差別民の皮田が平民の職域に進出することは許されていなかった。

だが、欧州の場合、このような身分上の差異はみられない。原皮集めから始まり、なめし工程や革の加工と販売までに関わつた主な集団のひとつがユダヤ人である。彼らの集団ではなめしもやるが皮革の最終加工も引き受け、それらを遠隔地に運んでゆく貿易商人や店で売る小売商人も輩出していた。つまり全工程に積極的に関わっている集団だつた。

革になるまでのなめし工程は長くて複雑でかなり

の重労働なのだが、その割にはなめし人の利益は少ない。一方、一旦なめされて革になると何倍、何十倍もの価値がつく。他の商品にくらべて皮革は高額商品となり、大きな利益が伴ってくる。この過程に関わる商人や皮を集める利権をもつ地域の権力者が大きな利潤を得るが、なかでも革製品を販売する商人がもっとも利益を上げられる構造になっている。



しかし欧州の場合、国際分業体制が早くから発達していた為、商人が地域の領主よりも大きな利益を得ることが可能であった。だがそれには大きな

ネットワークを維持してゆくことが必要であった。欧州と北アフリカ、中近東を射程にいれねばならな



かったからである。そこで信頼関係で結ばれた商業活動は集団のなかに蓄積されていく。商人・なめし

職人・皮革製造・販売業という全体の工程は世代を超えた信頼関係が構築されており、通婚関係による結びつきが核のひとつとなっていた。婚姻関係で結ばれていることで、親族と姻族、その友人たちとの結びつきがビジネスの信頼関係を保証していたのである。

イベリア半島(図1)では一五—一六世紀にすでに大規模な国際分業がおこなわれていた。この半島は高級革として有名になる「コードバン」を生みだした地域でもある。元来コードバンはコルドバの皮という意味で、スペインのコルドバ周辺では北アフリカのモロッコでなめされた山羊皮を輸入し、仕上げて欧州や中近東各地に送っていた。その品質で一世を風靡し、ブランドとして定着させたのはユダヤ人集団である。

皮なめしは動物の屍を扱うがゆえにユダヤ教典のタルムードでは卑しい仕事とされている。なめし職人と知らずに結婚した女性は無条件に離婚して賠償金まで請求できるとされていた。アラビア半島やイ

ベリア半島のイスラム教徒たちも家畜を屠ることは聖なる仕事と考えながらも、その後の皮なめしはユダヤ人の仕事と考えていて、汚い仕事とみなしていたという。だが帰るべき故国がなく、欧州やイスラム世界で生きていかざるを得ないユダヤ人移民にとって背に腹はかえられない。たとえ教典で批判されていてもやらざるを得ない仕事でもあった。

しかし同胞が同じ職種に従事していれば仕事はやりやすい。作業場でのきつい仕事を請け負う職人であれ、工房を統括する親方であれ、同じユダヤ人で親戚や姻族・その知り合いたちが一緒に働いているのであれば職場の定着率も高く、やりやすくなる。親方が完成品を扱う商人で、革商品を作り出し売りさばく仕事までをこなすには家族や親戚・姻族などを配置すればよい。これらのネットワークを何世紀にもわたって維持してゆけることが集団の経済的発展をもたらす鍵であった。その相互信頼を支える核のひとつが、集団が共有する「悲劇の歴史」である。ユダヤ人は第二次世界大戦中、ドイツのナチスに

よって虐殺されたホロコーストという悲しい歴史をもつが、それ以前にも欧州各地でスケープゴートにされ、時に虐殺された歴史がある。人口が少ない当時は、人口比で見れば、一〇〇〇年以上にわたって、現代のホロコーストと同じほどの殺戮を受けてきたことになる。また、殺されないまでも国家の収



図1 イベリア半島(現在)

奪により財産を没収され、コミュニティは弱体化されることもあった。そのなかから立ち直ってきたのは彼らが移住に強い民族であった故であらう。国際的な商業活動と多種類の専門技術をもつ職人集団であった彼らは迫害されても必要とする国々に移住して命脈を保ってきた。彼らにとって皮革業はその経済力と技術力を支える重要な職種のひとつでもあったのである。

3. マラノの悲劇

スペインのバルセロナにある、欧州でもっとも古いシナゴグ（ユダヤ教の教会）を二〇一二年に訪ねた時のことであらう。中世の街並みそのままの狭い石畳の道を通りぬけてユダヤ教のシンボルである六角形の星（六芒星）が掲げられている小さな入口をようやく見つけ、中にはいった。説明が英語で行われるというので待っていると一〇名近くの観光客が集まってきて、彼らと一緒に小さなホールに案内された。

ヤ人たちはずっとこの地に居住し重要な経済活動の担い手でありつづけた。迫害を受けるようになったのは、キリスト教勢力によるレコンキスタ（再征服）が進んだ一一世紀以降である。
イベリア半島がイスラム教系王朝に支配されるようになる、キリスト教勢力はレコンキスタを開始し、徐々に勢力を取戻していく。一二世紀にはポルトガル王国が成立、一五世紀末には半島に残った最後のイスラム教系王朝であるナスル朝を征服することでレコンキスタが完成し、スペイン王国が成立した。レコンキスタが進むとキリスト教国のイスラム教徒とユダヤ教徒は改宗するか出国するかを選択を迫られてゆく。イスラム系王朝の支配下では改宗は強制ではなく、ユダヤ人もキリスト教徒も税を納めることで居住や経済活動には制限を加えられなかった。むしろユダヤ人は職人や商人として重要な経済活動を担っていたので政権にとっては利益になる集団だった。キリスト教政権下でも王権は商工業振興に不可欠なユダヤ人を保護したが、スケープブート

欧州でもっとも古いシナゴグの一角が、ここが発見されたもの、この発見は当時建物に電気照明が施されていたシナゴグの面が、燭台なども失われていたもので、ユダヤ人協会がトラーヤや蠟燭立てを寄贈したくらいだった。それゆえシナゴグ内の展示物には博物館的な重みはなく、参観者たちにとってもあまり重要ではないようだった。むしろこの場所でユダヤ人の先達が迫害された歴史を追体験することが重要なだった。

**ユダヤ人協会
が――のあとの
トラーヤや蠟燭立
を、までをカット
してください。**

イベリア半島はローマ帝国の属州になった後、五世紀にはゲルマン系の西ゴート王国の支配下におかれた。ローマ帝国時代よりキリスト教圏であったが、八世紀初頭に西ゴート王国が滅びると、その後約八〇〇年にわたりウマイヤ朝やナスル朝といったイスラム教系の王朝が支配を続けてゆくことになる。この間支配者と居住民たちの宗教がかわってもユダ

としてターゲットにもなりやすかった。一般の人々は彼らの異質性を憎み、迫害し差別したからである。ユダヤ人は戒律で豚肉を食べることを禁じられているのだが、むりやりキリスト教徒の住民達の目の前で豚を食べさせられ、戒律を破らせられることもあったし、大勢の前で棄教を強要されることもあった。イベリア半島に住んでいたイスラム教徒であれば、北アフリカまたは中近東に逃れることが可能だったがレコンキスタの成立後、政権側は当初ユダヤ人に出国を禁じた。経済的に有用であり、ユダヤ人達がイスラム圏へ移住すれば敵対勢力を利用することになるからである。結局ユダヤ人は殺されるか改宗するかという選択肢しかなかったが、一般の人々は改宗したユダヤ人を「新キリスト教徒」と呼び、監視し蔑視した。少しでも気に入らないことがあれば「異教を捨てていない」という口実のもとに異端として宗教裁判にかけ、迫害し、死刑にすることもできた。人々はキリスト教に改宗したイベリア半島在住のユダヤ人を「マラノ」（豚）と呼び、蔑んだ。

それにも関わらず政権側にとってユダヤ人集団はきわめて有用であった。重税をかけても文句をいわず、口実を設けて財産没収をおこなうことも容易であった。ディアスポラとして長く生きざるを得なかったために、様々な主人に仕えることに慣れており、反乱をおこす心配のない従順な配下でもあった。彼らが手に職を持っていたのはディアスポラとして生きるためには必要な手段だからで、職人や技術者・医師・徴税人・教師などの専門職や金貸しや商人等が主な職業であった。つまり近代的な都市型ミドルクラスのさきがけのような存在でもあった。職人のなかでは、織物職人について皮革職人、特になめし屋や靴屋の比率が高かった。

一方一般人民は彼らを「キリストを殺害したユダの末裔」とみなしていた。たとえ改宗しても決してそぞぐことができない「穢れた血」をもつ集団とみなし、ことあるごとにスケープゴートにした。十四世紀に欧州を襲った黒死病（ペスト）は欧州全体の三分の一から三分の二の命を奪ったとされるが、こ

当時はすでにユダヤ教は禁制だったので秘かに集まっていたのですが、町中で総勢三〇〇名以上が惨殺され、難を逃れたユダヤ人も殺されるか強制的に改宗させられました」

当時の欧州全体の人口を考えると三〇〇人の虐殺であればひとりの村か町が一瞬で消えてしまうくらいの衝撃であろう。衝撃的な虐殺の話に驚いて、私は思わず「なんてひどい！」と憤激したのだが、他の聴衆は静かにうなづくだけで無言だった。おそらくそこに座っている人々は全員ユダヤ系でその事情を知っているのだろう。説明役は続ける。「パスツールらによって細菌学が確立されるのが一九世紀ですが、それまでは欧州では伝染病がよく流行しました。体を洗うと病気になるといわれていて肌を瘡蓋ができて医者体が洗わないように指示するくらいでしたから、キリスト教徒は不衛生な環境で生活していたのです」。この説明には皆苦笑していた。

の惨事は地元民によって時にユダヤ人のせいになされた。ユダヤ人らは「毒を井戸に入れてキリスト教徒を殺害した」と噂され、虐殺される事件が欧州各地で起こったのである。

シナゴークではその惨事について記述した古い書簡をみせながら説明が続いていた。「ペストは恐ろしい病気でみんながバタバタ倒れてしまい、欧州では三分の一から三分の二が死んだとされています。スペインでも死者が蔓延したのですが、他のコミュニティよりは生存者が多かったので、ユダヤ人たちは井戸に毒を入れたとか、呪術でキリスト教徒を殺しているとは非難されたのです。しかし事実とは違いました。ユダヤ人は戒律によって食事の前に手を洗わなければならなかったため、衛生的な生活をしていたのです。それが彼らをペストから守ったのです」

「一三九一年八月五日のことでした。キリスト教徒は集団ヒステリー状態になり、このシナゴークで秘かに集まって祈っていたユダヤ人は虐殺されました。

説明が終わってから展示されている文書などを眺めていると、パナマ帽をかぶり麻の白いスーツを着込んだ紳士が話しかけてきた。あたかも避暑地からやってきたようなしゃれた身なりだった。ユダヤ人のなかに混じって初歩的な質問をしている東洋人のモノ好き女に好奇心を抑えられなかったようだった。私が日本人で、ユダヤ人と皮革業の関連を調べていると知ると目を輝かせ、妻でジャーナリストだという連れの女性と、同僚の研究者が何か知っているかもしれないと話した。彼はアメリカのプリンストン大学の教授で、ドイツ文学専門でカフカの研究をしているという。そういえばカフカはユダヤ系だったと思いたしながら、昔カフカを読んで衝撃を受けたことを話すと「日本人はカフカが好きなんですよねえ」と満足そうな顔をする。

だが私もまたこの二人に大いに興味をかきたてられた。くだんの紳士の英語の訛りがどうも気になって仕方がない。夫人のほうは極く自然なアメリカ西海岸のインテリの英語を話す。だがドイツ文学の教

授の英語には訛りがある。母国語にしてはあまりに正確でゆつくりすぎて、どう考えても生粋のアメリカ人の英語に聞こえない。東欧のどこかで極めてよい教育を受け、それから米国に移住したのだろうか。いったいどの国で育ったのだろうか。好奇心を抱き「ご出身はどちらですか？」と尋ねてみる。すると思いがけない質問をくらったとでもいうように目をみはって「米国ですよ」という答えがかえってきた。その顔には「もちろんですよ」と書いてある。「ほんとに米国で生まれたのですか？」と再度念を押してみた。詮索して失礼かと思つたが言い訳がましく「あなたの英語はアメリカ人にしては正確すぎ、異邦人の英語のようだと思います。アクセントが東欧風な感じがあります。ご専門のドイツ文学の影響でドイツ語の訛りが身についてしまつているのでしょうか？」などと先走りしてしまつた。すると紳士はちよつと考えこんでからおもむろに口を開いた。「おそらくそれは私がニューヨークのブロンクス出身だからでしょう。ブロンクスがどういふところか

ユダヤ系が とい
うところをとつて
ください。

教授もアシケナージと呼ばれる東欧系のユダヤ人で、イベリア半島系のユダヤ人（スファラディム）とはかなり異なつた文化的背景をシケナージは生真面目で面白味す。トーラー（律法）をやたら勉強にはラバイがいて、シナゴグに律を守り、父と息子の間でもトて激しく議論することも許されて金貸し業などの金融界やビジネス界で活躍する人が多く、アカデミックな領域にはユダヤ系が圧倒的な強さを持っています。医学も得意分野です。一方イベリア半島系のスファラディムたちはキリスト教に改宗を強制されたのでこつそりユダヤの慣習を守らざるをえなかつた。この為、ラバイのあらず、律法についてはほとんど知識がありません。しかしイスラム教やキリスト教の影響を受けて神秘主義のカバラの伝統を生みだしたように天文学・文学にも才能があります。豊かな芸術性があり、スペイン語、ポルトガル語のほかにアラビア語にも習熟し、数々の

ご存知ですか？」。私がうなずくと、「私がゆつくりと正確に話すのは、西海岸の名門大学にはいつてから周囲に受け入れられるために訛りを消そうと努力したからでしょうね」とつぶやいた。

ニューヨークという大都会はユダヤ系移民とは切つても切れない関係にある。なかでもブロンクスは欧州から移住したユダヤ人と深い繋がりがある。手に職がある「ワーキングクラス」のユダヤ人はそこに住むことが多かったらしい。日本ではユダヤ人というとはほとんどが金持ちでインテリだと思われているが、現実にはつましい生活をする労働者やホワイトカラーが多い。キツパという小さいお皿のようなユダヤ人の帽子をかぶり髭と髪を長くはやしたラバイ（導師）たちがブロンクスを散歩しているのに出会うこともめずらしくない。このプリンストンの大教授も、そうした環境のなかで育つたのである。

もつとも作家のカフカもくだんのプリンストン大文学を生みだしました。過去に強制的に棄教させられたりしているのでキリスト教徒用、ユダヤ人用、イスラム教徒用の名前を使い分け、仮面をかぶつて生きてきたのです。そして強いられた宗教のなかで生きていく間に宗教自体に疑いをもつに至ります。結局ユダヤ人のなかには無神論者になつた人も多いのです。近代の世俗主義者・無神論者の先駆けとなつたともいえるでしょう。彼らのなかにはアジアやアフリカ、南北アメリカ大陸をまたにかけて貿易をする大商人たちも多かつたのです。皮革関係の商人たちもスペイン人やポルトガル人と名乗つてはいても、おそらくユダヤ人だったのでしょうね」

スファラディムたちはたとえ改宗しても「穢れた民」「豚」という落胤を押し続けた。しかし一旦キリスト教徒になつた以上、信用を築き迫害されないために通常のキリスト教徒以上にキリスト教徒であろうとした。アジアやアフリカ・新大陸に渡つたポルトガル宣教師はほとんどが新キリスト教徒で



染色について工場場で説明するドミンゴ氏 (写真左)

あつたといわれている。また、ポルトガル、スペインからの遠距離貿易商人には新キリスト教徒が多いという。日本にはじめてキリスト教をもたらしたフランシスコ・ザビエルも、インドやフィリピンなどの東南アジアを訪れたポルトガル人商人や宣教師のほとんども新キリスト教徒であつたという。

4. 北アフリカとイベリア半島を繋げる ユダヤ人

ポルトガル北部の古都ギマランイスは、十五世紀にスペインから分かれて独立したポルトガル王国発祥の地で、昔から皮革の産地でもある。ここで出会った皮革業同業者組合の組合長のマニエル氏はユダヤ系で、一三歳でなめし職人として伯父に弟子入りし、働きはじめた。

首都のリスボンなどがある南ポルトガルに比べて農村地帯が広がる北部ポルトガルは、若年労働力を製靴工場などで使っていた。EUに加盟するために政府の監視が厳しくなり児童労働は八〇年代

当初私は = をとり、この地の皮革工場と北アフリカの分業体制について説明されたとき、当初は工場の排水に - というふう

には姿を消したものの、それまではたという。ギマランイスにはロルダ皮革会社があり、四〇名が働いている同業者組合のメンバーだった。北アフリカのモロッコと取引があり、そこで牛皮や羊皮をなめしてもらい、黒や赤に下染めした皮革を輸入してこの工場ですぐに再び加工するという。当初私はこの地の皮革工場と北アフリカの分業体制について、工場の排水に対する厳しい環境基準を守らねばならなかったことと、若年労働者を安い工賃で使えなくなつたからではないかと思つていた。しかし調べてみると、実際は北アフリカとの皮革の国際分業は一〇世紀以降ずっとおこなわれていたのだつた。

ユダヤ人が商人や職人としてイベリア半島や北アフリカに居住しはじめたのは少なくとも旧約聖書にあるソロモン王の時代(紀元前一〇世紀)からともいわれている。ユダヤ人は欧州と地中海世界の皮なめしと皮革製品製造に古くから関わり、一〇世紀のパレスチナとシリアではほとんどの皮なめし職人は

ユダヤ人であつたという。東ローマ帝国(ビザンチン帝国)の首都のコンスタンチノープルでは一三世紀にはユダヤ人なめし職人はギルドを形成し、西ヨーロッパに皮革貿易の販路を広げ、大量のゴールドバの皮革をヴェニス経由でフランスに輸出していた。モロッコのフェズに住むユダヤ人商人は一八世紀初頭には原皮

をスペイン、ポルトガル、ジブラルタルなどに輸出していた。アルジェリアやモロッコではなめし工房と靴屋の多くがユダヤ人であつて、中近東のメデイナにもユダヤ人商人は進

出していた。北アフリカから原皮がスペインに運ばれ加工されて欧州にもつていられるだけではなく、足りない原皮を欧州の各地から買い付けて他の場所に運んで加工させてから欧州で売りさばくこともおこなわれており、やはりユダヤ人商人が関わつていた。これらの複雑なルートはリスクを伴うので継続するには信頼できるパートナーが各地で必要であつた。一九世紀以降、ユダヤ人は欧州から北米や南米に移住する人々も多かつたがそれまで培つた皮革ビジネスを続ける人々もおり、現在世界的に有名な皮革メーカーのなかにはオーナーがユダヤ系である場合も少なくない。

おわりに

近代以降、皮革産業は大規模化してゆく戦争と西欧列強による植民地の展開、そして産業革命による交通手段の発達などによつて花形産業に祭り上げられてゆく。もっとも皮革部門の機械化はかなり遅れて始まつている。産業革命がいち早く織物業を機械

化し、工業化を促進してゆくのだが、皮なめし部門自体はようやく一九世紀も半ばになってから機械化が進行した。しかし革は機械に不可欠な部品であったし、産業革命以前から進行していた幹線道路の整備は馬車の数を増大させ、車体や馬の鞍に必要な革の需要を一層伸ばしていた。そしてナポレオン戦争以降大規模化した欧州の軍隊は、一度に一〇〇万足ものブーツを必要とした。人口が増えた欧州社会では靴の重要も大きく膨れ上がっていた。

皮革を扱う商人たちはこのような皮革産業の成長期に工場に投資し、一層グローバル化してゆくのだが、ユダヤ系商人たちは豊富な財力によって英国やスペイン社会では貴族として認められる場合もあった。化学的な技術をもってなめしや染色などを行う職人は専門家として社会的には中流階級であったし、利潤の多い皮なめし業や製靴業などに携わる資本家は欧州の政財界に多かった。いってみればユダヤ人たちは皮革業全体を自らの労働と汗によって押し上げた功労者といってもよいであろう。

近代アジアでもユダヤ人集団のように皮革業に特化した民族集団として経済発展を遂げたディアスポラ集団がみられる。その代表例は客家（中国の華南地方出身の華僑）やインドのイスラム教徒集団である。次稿ではアジアのディアスポラと皮革業の関わりについての歴史を探ってみたい。

（にしむらゆづこ・駒澤大学教授）